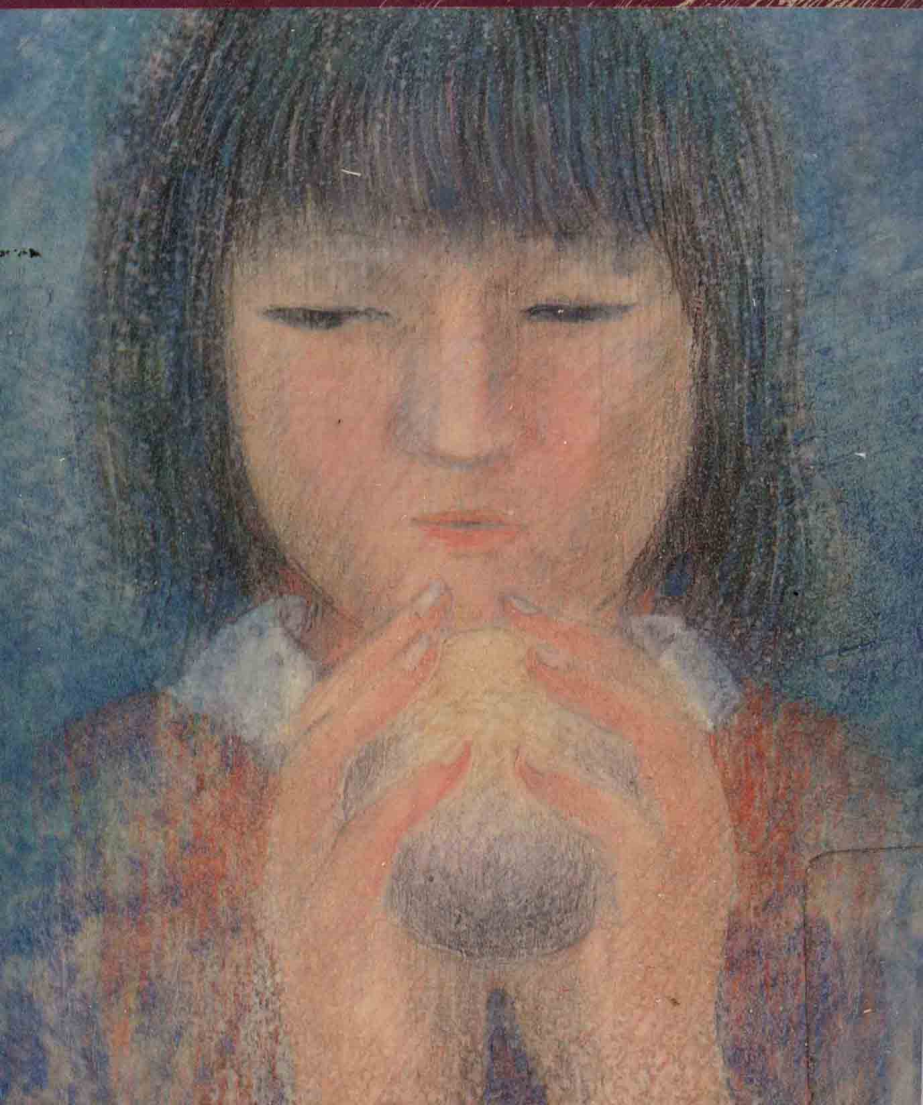


長編小説

藍色の入江

三好京三



藍色の入江

三好京三



藍色の入江

昭和五十八年二月二十五日 初版発行

著者 三好京三

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)二〇五一(編集)
〇三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内

電話 〇六(三一二)一五七三

印刷所 大日本印刷

製本所 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© K. Miyoshi 0093-505110-3214

Printed in Japan

光	愛	回	夏	実	岬	乱	会	白	密	城	目次
芒	憎	遊	休 み	踐		舞	議	磁	室	下町	

278	245	208	170	138	115	91	60	42	22	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

装画／伊藤 彬
装幀／サン・プランニング

藍色の入江

城下町

がっしりした大手門が、黒ずんだ木肌に江戸時代のおいを残し、高台に建っている。そこからは、春の日ざしに物倦く光っている太平洋と、ほとんど足元と言っているほど市街地深く入りこんでいる入江が一望された。入江の北岸には、色とりどりの旗を立てた漁船が並んでいる。

R県千代野原市は、人口三十万、漁港をかかえた城下町であった。そして、市内で最も規模の大きい栗小路中学校は、大手門と大手櫓の残る城趾にある。そこにはもととは小学校が建っていたのだが、戦後に新制中学が発足した際、児童数の多くなっていた小学校を他に移し、栗小路中学校を置いたものである。

小学校の沿革誌には、つぎのような記載がある。

「明治五年九月、公立学校設立ヲ企テ、櫓山久右衛門金二千五百円、泉田貞蔵一千三百円、吉野忠五郎一千円ヲ拠出シ、外ニモ有志三百十一名オノオノ貨ヲ積ミテ、合

計六千五百二十三円六十一銭四厘ニ至ル。スナハチ千代野原城ヲモツテ校舎ニアテ、開校ス。在学生徒ハ本町各所ニ散在セシ家塾、寺小屋等ヨリ收容シ、創立時、教室数七、教員数九、生徒数一七〇」

鈴沢竜平はひとしきり海と市街地を見渡し、車の置き場所にもどろうとしたが、ふと考えを変えた。城趾の裏に残っているという、歴代藩公の墓所を見ようと思ったのである。

三月末の日曜日であった。四月一日から、鈴沢竜平は栗小路中学校の教師となる。早手回しであったが、竜平は昨日引越しの荷物を運び終えてしまっていた。赴任までにはまだ四、五日ある。けれども、もし学校に人がいるなら、挨拶かたがた校舎を見て置いてもいいと思ったのであった。しかし、学校の戸口にはどこにも鍵がかかっていて無人だった。無駄足を運んだことになる。そのまま帰ろうとしてふと気が変わったのであった。

大手門をくぐると、あらためて中学校の門柱がある。

その左手には隅櫓。真正面に校庭をへだてて木造二階建ての校舎があり、校庭の右手は樹木の鬱蒼たる林になっている。その奥に藩公の菩提寺と墓所はあるということであった。

林の入口に茶店があった。フィルムも売っているという目じるしののぼりも立ててある。観光地風であった。なるほど、ここは学校ではあるが、城趾でもあり、藩公墓地を控えてもいるから観光地になっているのだ。

杉や櫟の大木が両側に並んでいる小道に入った。空気がにわかに冷たかった。前方を、肩をすくめて歩いていく着物姿の女がいた。竜平は追いついて声をかけた。

「この奥に、昔の殿様のお墓があるんですね？」

女は三十歳前後に見えた。しかし、ふり向いた表情がはっとするほど沈んでいた。

女は蒼ざめ、その上、泣いたあとでもあるように眼を赤くしている。ただごとならぬ気配があった。竜平は気軽に声をかけてしまったのを悔い、そのまま行き過ぎようとした。すると逆に女が声をかけた。

「あなたは東京の人ですか？」

「いえ……」

立ち止まって竜平はふたたび女を見た。悩みにうちひしがれているという感じがあった。眼が大きく鼻筋がとおっている。唇も小さくとのつていて、ふだんにはおやかな美人に違いなかった。しかし、何さま心になみなみならぬ重荷をかかえているようである。

「すみませんでした」

女は目を伏せた。竜平が東京の人でなかったら、用はないというしぐさであった。

「東京の人間ではありませんが、少しは東京のことも知っていますよ」

竜平は六年前に東京のV大学を出ている。私立大学としては聞こえたところだ。その文学部である。四年間いた下宿は大井の山王神社の近くにあった。

「バーのこともですか？」

女は、下を向いたまま、噛みしめるような口調で訊いた。

「ええ。大学とか下宿の近くの、安っぽいバーについてなら」

「そういうところに勤めているのは、どういう人でしょう」

「さあ……」

竜平は答に詰まった。酒は好きでわりにバーにも通ったが、ホステスの来歴や境遇について考えたことはあまりない。訊かれてみると、年が行っていてもなお水商売を続けるという女性は、あまりしあわせとは言えない気がした。

「わたしのよな田舎者でも勤まるでしょうか？」

「そりゃあ大丈夫です。あなたは美人でいらつしやるから」

「まあ」

女は羞じらうような笑いを見せた。頬に赤味がさすと、やはり目に立つほどの美貌であった。

「しかし、東京でこれから水商売をなさるんですか？」

竜平が訊くと、女はいつとき口をつぐんだ。そして、気を取り直すように、

「殿様のお墓におまいりなさるんですの？」と訊き返した。

「はい、そのつもりです」

「じゃ、御案内しますわ」

女は歩き出した。後について歩くと、生えぎわを見せたうなじがまぶしかった。竜平には着物のことはわからないが、灰色の地に井桁の赤い模様がついている。帯には花模様があった。

「どちらからいらつしやったんですか？」

女は、竜平を旅の者と思っっているらしい。

「四月からこの町の人間になります」

とこたえると、女は驚いた顔になった。

旅の者と思つて、東京のホステス稼業のことを聞いたりしたのであらう。しかし、それがこの町の人間になろうとする者だったとすれば、たくらんでいたこれからの行動の秘密を、身近な人間に知られてしまったことになる。女は、警戒的な物腰になった。

「中学校の教師です。四月からはしよつちゅう、この辺を散策することになるでしょう。栗小路中学校で国語を教えるんです」

女は先ほどより深く肩を落としていた。やがて歩きながら、思い切つたように口を開いた。

「わたし、今度栗小路中学の二年生になる、折居美加の母なんです。けれど、もうじき、そうでなくなりそうです」

「どういふことなんですか？」

「家を出ます。東京で、バーのホステスなり、家政婦なりをしようと思っっているんです」

「思い止まることはできませんか？」

竜平は、教師の声になった。

この三月で、教員生活は満六年である。初任は山の中の小規模校であった。次が厳密に言えば三月末まで籍が残っている現在校で、内陸部の人口二万ほどの町にある。その二つの学校で、竜平は、家庭のもめごとに胸を

いためる中学生たちを、時折目にして来た。そして、自分は結婚もしていない人生経験の浅い若僧であるのに、そのような生徒の父母と逢って、生徒のためにおだやかな家庭生活に戻ってくれるよう、頼んだり忠告したりしたものである。

「おしまいです。もう、だめなんです」

美加の母親は、一言ひとことをたしかめるように言った。

「おしまいって言うことは、ありません。僕は、いつも、これから、と思っています。御主人なり、お子さんなりのことで頭がいっぱいになっておられるから、思わず袋小路に入りこんでしまい、もうおしまい、と絶望的になっちゃうのではありませんか？」

「何日も、何か月も考えましたもの」

「僕は、もしかすると美加さんの担任になるかも知れませんね」

ふと思いついて言った。

「僕は、二年三組を受け持つんだのですが、娘さんは何組ですか？」

「さあ、一年生では十一組でしたが、こんどは何組なものですか……」

母親は気がなさそうにこたえた。

「まだ、発表になってはいないのかも知れませんが」

「もし発表されていたとしても、あの子は教えてくれません。わたし、あの子とここ二か月ほど、ほとんど口をきいていないんです」

「そんなに仲が……」

悪いのですかということばは呑みこんだ。

「ええ、もう、陰悪って言うていいくらい。わたし、継母なんです」

母親は放り捨てるように言った。

折居美加の母親は名を多津子といった。中学二年になろうとする娘を持つにしては若過ぎると思っていたが、継母と聞いて二度びっくりである。初婚であろうか、再婚であろうか。相手の男、つまり美加の父親は、どういう職種にいているのであろう。美加と父親とはうまく行っているのであろうか。

疑問がつつぎに浮かんで来た。しかし、今逢ったばかりで、立ち入りすぎたことを聞くのはやはりためらわれる。

薄暗い林の中の小径を、何度か折れ曲がると、左手に、山門と塀をめぐらした菩提寺があった。そこからさ

らに五十メートルほど行くとまたもや山門があり、その奥が墓地であった。

歴代藩公の墓は一目でわかった。すべて同一とは言えないが、ほぼ同じ形の石室が正面に並んでいたのである。墓を雨ざらしにしない配慮であろう。屋根のついた石室の中には、大きな位牌の形をした墓石が安置されている。

称徳院殿勇撃松林大居士

初代藩公の戒名はそう読まれた。各石室の前には藩公の名を書いた立札が建っているのである。竜平は一つ一つの石室を、観光客のようにのぞいて歩いたが、折居多津子は、いちいち敬虔に手を合わせて拜んでいた。

帰り足になった。山門の左手には普通の墓が並んでいる。多津子は竜平を振り返り、

「わたし、先祖を拜んで行きます」

と言った。竜平はうなずいた。多津子は、白足袋に草履をはいた足元を気にしながら、一般墓地に入った。そして、目立って大きい墓石の並んでいるところで合掌した。

多津子は、先に帰ってもらいたいと思っているかも知れなかったが、竜平も後に続いた。古びた最も丈のある

自然石には、

宮野六左衛門之墓

と刻まれている。並んでいる墓碑はすべて宮野姓であったから、この墓地は婚家のものではなく、生家のものであるとわかった。墓の大きさからみると、多津子はよほど由緒のある家柄の出である。それを言うのと、

「代々、家老をつとめたそうです」

とこたえた。家系について、晴れがましく思っているひびきがあった。多津子の婚家の中のもめごとは、その名家意識ともかわりがあるのではなからうか。

「どこか、お茶でも飲みませんか？」

と竜平はさそった。

「ぶしつけに、御案内をお願いしたんですから」

実際は、女子中学生の母親として、家出を思い止まってもらいたいのであった。

「御一緒致します」

多津子は存外素直にこたえた。

「けれど、わたしがこの町を出る決意は変わりません」とよ。今も、御先祖に別れを告げて来たんですから」

車は高台への坂をのぼり切った所の空地に置いていた。遠慮をせずに乗りこめば、栗小路中学校の校庭にも

入れたと思ひながら、折居多津子を車に伴った。道は大きく迂回しながら次第に市街地へおりてゆく。

「旦那さんはどういうお仕事ですか？」

と竜平は訊いた。

「会社員です」

素っ気なく多津子はこたえた。立ち入って詮索されたくないというひびきがあった。

生徒たちの親の職業を調べていて、公務員と答えられ、腹の立つことがある。公務員と言っても国家と地方の別があり、それらはさらに細かく職種が分かれているのだ。教師です、とか、営林署につとめています、とか、具体的にこたえてもらいたい。しかし、具体的にこたえるよりも、公務員とぼかす方が得策と考える親もあるらしい。竜平は、多津子の「会社員」というこたえを訊き、「公務員」とこたえられたときのような拒絶を感じた。

助手席の多津子の指図する道を辿り、駐車場のある郊外の喫茶店に入った。多津子は、家出する自分の立場をおもんばかって、隣人から見咎められることのない、その喫茶店を選んだ気配がある。にこったピンク色で外部を塗らたてた、いかにも安直なホテルが、喫茶店の隣に

は建っていた。コーヒーを注文し、

「思い止まることはできませんか？」

と武骨に言った。多津子の娘の美加を、自分が受け持つことに決まったような気持ちになっている。

「それはおっしゃらないでください」

固く思い詰めたように、多津子はテーブルの面に目をやった。それから押し黙り、コーヒーが来てから、

「あの子、面当てに、よくお芝居をするんです」

と言った。

「どういふ……？」

「鴨居に紐をつるしたり、手首に傷をつけたりするんですの」

「自殺をはかるんですね」

「それがお芝居なんです。あてつけです。気が強いばかりで、根は臆病なあの子が、死ぬことなど、できるもんですか」

「……………」

「はじめはおそろしくて気味が悪くて、鴨居から垂れさがっている紐を、毎日、はずしに娘の部屋に入っていました。しかし、もうやめています。きりがありませんもの。それにあの子、絶対自殺なんかできないんです。ま

ちがつて、ほんとに死んでしまったって……」

多津子は小さな声で、わたしは知らない、と結んだ。

竜平は気持ち暗く沈みこんで行くのがわかった。竜平の両親は、内陸部の県都に近い、長板沢という人口一万六千の町で、酒を商っている。兄弟は竜平を含めて四人。兄の昭平と弟の啓三、それから妹の悠子である。両親も兄妹もみなのもみりした陽気な性格で、互いに角突き合うというようなことはまずなかった。

——なぜ、こうも憎しみ合わねばならぬのか——

惨鼻な思いがする。義理とは言え、親子ではないか。

多津子はいったんつぐんだ口を開き、

「あの子、根性が悪いんです」

とつけ加えた。性格と言うべきところを、根性と言ったところにも、娘に対するなみなみならぬ憎悪が感じられた。事情をよく知らぬ竜平のさかしらな忠告などで、二人の仲が好転するとういうようなことはとても考えられないようであった。成り行きを見守るしかない。

「美加さん、クラブは何ですか？」

と訊いた。

「テニスですって。けれど、まじめにやっているのかしら」

「それは好都合だ。僕は大学でテニスをやっただけです。もっとも本格的なものではなくて同好会ですがね。それで、栗小路中学校ではクラブはテニスを持たせてもらおうと思っています。もし担任でなかったとしても、美加さんとは親しく会える」

「はやりでしょう、テニスは。あの子、恰好つけるつもりでクラブに入っただけです。練習にも身が入っていないに違いありませんわ。何しろ、倦きつづけて、身のまわりの始末が悪くて、その上、強情なんですもの」

「東京へ行かれても……」

と竜平は話題を変えた。

「僕にだけは居所を知らせていただけないでしょうか？」

「ええ……」

多津子は気がなさそうであった。

「夫は、氣違ひになつてわたしを探さずです。ふだんは構いつけないくせに、わたしが姿を消すとあわてるんです。わたし今度こそ、絶対に見つかからないようにしようと思つていました。それが、旅の人だと心を許したあなた、この町の中学校の先生だなんて……」

やはり、搜索の端緒をつくつてしまったと悔んでいる

のであった。

「秘密は守ります」

と竜平はまじめな顔をした。

「あなたが、いいとおっしゃるまで、美加さんにも、もちろん、旦那さんにもあなたの居場所は明かしません」

「信じてよろしい？」

多津子はうかがうように竜平を見た。思いがけぬなまめかしさがあつた。

「信じてください」

「なら、わたしと共犯になつてくださいます？ わたしに、ふんざりをつけさせるために、隣の建物に行つてくださる？」

ピンク色のホテルのことであつた。

竜平はたじろいだ。遊び心からの誘いではないのがわかつた。眼が思い詰めたように竜平にそそがれている。

多津子は浮気をしようというのではなくて、我が身を取り返しのつかぬところに放りこもうとしているのであつた。

「とんでもないことです」

竜平は立ち上がった。レジは奥にあつた。そこへ行つて勘定をした。多津子を説得したり、翻意させたりする

のは、無理のようである。

席に戻ると多津子の姿がなかった。咄嗟に、逃げられたのだ、と思つたが、いや、手洗いかも知れない、と思ひ直した。椅子に掛けてしばらく待った。現れない。やはり拒絶されたことを恥じて逃げたのかも知れなかつた。

十分ほどで立ち上がった。山手の郊外であるから、タクシトもそう多くは見かけられない。多津子は、徒歩でここを去つたのであろうか、それとも折よくタクシトが拾えたのであろうか。

下宿は町の繁華街の裏手にあつた。とりあえずそこに戻つた。昼近い。午前中に栗小路中学校を訪問し、午後、現任地へ帰るつもりだったのである。しかし、もう発とうと思つた。昼食は、どこかのドライブインでもとればいい。

出かけようとして、やはり折居多津子が氣になつた。

ふと、栗小路の校長から訊けば、多津子の家がどこかわかるはずだと思つた。校長の名刺を見てダイヤルをまわした。名を浅利忠吉と言つた。

「もしもし、鈴沢竜平です」

浅利は在宅していた。

「校長先生は、折居美加を御存じですか？」

「ああ、知っていますよ。折居達彦という、縫製工場の工場長の一人娘です」

「家はどこでしょう」

「紺屋町——つまり、城の北側の、今は住宅地となっているところですよ」

「電話番号まではわからないでしょうね」

「いや、電話帳を見ればすぐだよ」

なるほど、父親の名前さえわかったら、調べればわかる。電話を切ろうとすると、

「どうかしたんですか？」

と校長は訊いた。

「ええ……」

竜平は口ごもった。多津子のことは一切秘密の約束である。

「美加がまた、何かをやらしましたか？」

校長がそう言うのだから、美加はやはり学校の問題生徒になっているのであった。

「いえ、美加という子と会ったというわけではありませんせん」

「じゃ、母親か誰かと……」

「違います」

と思いつつ嘘を言った。

「では？」

「今、藩公の墓地へ行つて来たんです。山門のわきの、宮野家の墓も見て来ました」

「ほう」

「宮野家は、美加の母親の生家にあたるのだそうですね」

「それは知らなかった」

「通りがかりの人に教えてもらったんです。そして、美加の噂も……」

嘘に嘘を重ねている。

「狂言自殺の常習というようなことですか？」

「ええ、まあ……」

「学校でも手を焼いているんです。夫婦仲のよくない家庭だね。夫婦仲に加えて親子仲も悪い」

「美加という子は、父親ともよくないんですか？」

「その辺のところはよくわからない。しかし、母親とはもうだめだね。なにも無理して一緒にいることはないと言いたいぐらい仲が悪い」

「はあ……」

「もっとも、これはわたしが直接調べたことではなくて、一年のときの担任がそう言うんだがね」

「担任は誰ですか？」

「菊畑加寿子さん。御主人は市内で薬局をやっています。あ、これなら電話はすぐにわかりますよ」

校長は、こちらが訊かないうちに、手帳でも繰るかして菊畑加寿子の電話番号を教えてくれた。

「テニスがうまいと言うんで、折居美加という子は気になったんです。僕は四月からテニスのクラブを担当させてもらいたいと思っていますから」

「そうですか。テニスクラブを受け持つのはいいが、しかし、美加という子は気長にかからないと……」

校長は竜平が美加に強い関心を示すのに、あまり賛成ではないようであった。電話を切り、続いて菊畑加寿子の家のダイヤルをまわした。これも在宅であった。

「まあ、鈴沢先生」

菊畑は、まだ会ったことがないのに、大袈裟になつかしげな声を出した。

「四月からはよろしく願います。クラス変えをしましたから、一部の生徒だけですけれど、わたしの受け持った子もお世話になります」

「その中に、折居美加という子が入っていますか？」

「あら、どうして御存じですか？」

「ええ……」

また校長についたと同じ嘘を繰り返さなければならぬ。竜平は歯切れ悪く美加に関心を持つに到ったいつわりの経過を語り、

「どうでしょう。僕の受け持ちになっていますか？」と訊いた。

「ええ、なっています。二年三組です」

「淋しがりの子なんですか？」

「ええ、淋しがりというか、甘ったれとかいうのか。でも、結構、気は強いんですのよ。首吊りしたり、手首を切ったり、しょっちゅう自殺未遂もやらかします」

「校長先生は狂言自殺と言っていましたか……」

「でしようね。あまりにも回数が多過ぎます。そのくせ大事に到ったことはないんですから」

「学校ではどうですか？」

「倦きっぱいですね、きまりもよく破る方です。成績は中。勉強すればトップクラスになれるのに、やりません。学校もよく休みます。休んだ日には必ずと言っていいほど自殺未遂です」